西照

西照寺寺報「さいしょう」
第１５号
2006年８月10日
発行　浄土真宗本願寺派　西照寺
高岡市吉久２丁目４－40

祠堂永代経　勤修

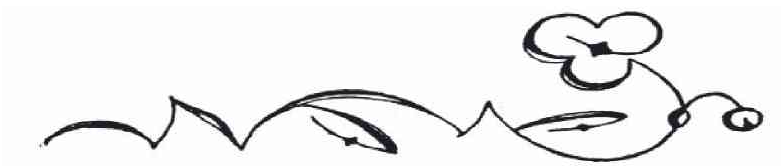
左記のとおり今年度の祠堂永代経をお勤めいたします。
お参りください、ませ。

おつとめの時間

八月二十二日（火）午後二時～
二十三日（水）午前九時半～
午後二時～（太子講併修）

布教使　公文名　真師（射水市市井光照寺住職）

西谷山　西照寺



仏壇（ぶつだん）の前に座って

ヘレンケラー

一八八〇年六月、アメリカのアラバマ州タスカンビアという町に、ヘレンケラーは生まれました。三重苦の病を背負いながらも、後にハーバード大学附属のラッドクリフ女子大学を卒業され、社会福祉家として宗教家として世界的に活躍をされた方です。多くの彼女にまつわる本や、子供向けのマンガなども出版されています。

日本には三回来られていまして、日本のヘレンケラーと言われた中村久子さんとも会われています。中村さんは、一八九七年の生まれで、両手両足の切断（三歳の時）という重い障害を抱えながら、苦難の多い人生をお念仏一筋に力強く生き抜かれた方です。互いに出遇えたことを深く喜ばれたと伝えられています。

さて、ヘレンケラーは、二歳の時に原因不明の熱病にかかって重体に陥ります。辛うじて一命はとりとめたものの、目が見えない、耳が聞こえない、話せないという三重の苦しみを背負うことになりました。両親の嘆きはどれほどだったでしょう。八方手を尽くしましたが、当時の医学では彼女の病気を治すことは出来ませんでした。

それでも、せっかく人間として生まれてきたのだから、何とか人間としての心を育てたいと願われた両親は、七歳の時にアン・サリバン先生（女史）に教育を頼みます。

タスカンビアの自宅を訪れたサリバン先生は、両親とヘレンを前にどうしようかと悩んでいました。どうすれば教育が出来るのだろうか。

丁度、ヘレンはパーキンズ盲学校から贈られた人形を持って遊んでいました。

ふと思い立ったサリバン先生は、楽しそうに遊んでいたヘレンから人形を取り上げました。そして、きょとんとしているヘレンの手のひらにＤＯＬＬ（人形）と文字を書いてみました。もう一度人形を持たせる。また、手のひらに文字を書く。そんなことを何回か繰り返しているうちに、今度は、ヘレンがサリバン先生の手のひらにＤＯＬＬ（人形）と書いてくるではありませんか。

これなら何とかいけそうだ。そう直感した先生は、それから、ヘレンに物を触らせ手のひらに文字を書くという方法で、教育をはじめていきました。三ヶ月にして、ヘレンはもう三百の言葉を覚えたといわれています。そうして沢山の言葉を覚え、大抵の言葉を理解できるようになりました。大変な努力であったろうと思います。

ところが、どうしても分からない言葉がでてきました。それは「愛」という言葉です。

確かに、何物も自分が手のひらで触れて見ぬ限り、理解できなかったそのころのヘレンにとって、手で触れてみることができない「愛」は、なかなか分からなかったようです。

ある朝、先生と庭で遊んでいるときに、思い余って聞きました。

「先生、愛とはなんですか」

サリバン先生は、そっとヘレンの手を取って、「それはここにありますよ」とヘレンの心臓を指さしました。

自分の心臓がドキンドキンと鼓動を打っています。けれども、どうもよく分かりません。その心臓の鼓動が「愛」でないことは、おぼろげながら分かります。

そこで、先生が持っておられたスミレの花の匂いをかいで、「先生、愛とは花の美しさのことですか。」と聞きました。

「いいえ、それは愛ではありません」

先生はそう言われました。

ヘレンは、また考えました。その時暖かい太陽が照らしていました。

今度は、暖かい太陽の光のさしてくる方向を指さしながら、「先生、これが愛ではありませんか」と聞きます。けれどもサリバン先生は今度も首を振られました。ヘレンは、困ってしまって、がっかりしました。先生はどうして「愛」を示すことができないのだろうか。不思議でたまりません。

そんなことがあって何日かたちました。

その日は、朝から降っていた雨もあがり、雲に隠れていた太陽がさんさんと輝きをましていました。

ヘレンは、太陽を指さしながら、もう一度先生に「これが愛ではありませんか」と尋ねました。

その時先生は、「愛とは、今、太陽が出る前まで、空にあった雲のようなものですよ」と答えられました。

「あなたは手で雲に触れることはできませんが、雨には触れることができます。そして花や渇いた土地が暑い一日のあとで、どんなに雨を喜ぶかを知っています。あなたは愛には触れることができませんが、それがあらゆる物に注ぎかける優しさを感じることはできます。愛がなければあなたは幸福であることもできず、その人と遊ぶことも望まないでしょう」

ようやくヘレンは、「愛」を理解できるようになり、自分の心と他の人の心との間には、目に見えぬ糸がむすばれていることを感じるようになりました。

お仏壇とは

お仏壇は、仏様の国（浄土）をかたどったものです。言葉を変えれば、仏さまの「愛」、仏教では「慈悲」という言葉で表現してきましたが、その心が形となって私たちにとどけられたものと受け取ることができます。

雲が雨となって具体的にそのはたらきを示すように、お仏壇は、阿弥陀さまのお慈悲や仏さまの世界（浄土）へ帰っていかれた亡き方々の心の、私への具体的なはたらきといえるでしょう。

お仏壇の前に静かに座って、その荘厳を通して、阿弥陀さまや亡き方々の「愛」を感じ取り、日々の日暮しを見つめ直したいものです。

（文責　住職）

真宗の行事　　＜ お盆会 ＞

お盆は、中国で確立し日本に伝わってきた仏教行事です。

盆とは、盂蘭盆の略称で、正しくはサンスクリットの ullambana、烏藍婆拏（ウランバナ）であり、倒懸(とうけん)と訳され、「逆さ吊りの意であって地獄での苦しみを意味する」とされています。

盂蘭盆経によれば、釈尊の弟子のお一人で、神通力第一と言われた目連尊者が、その不思議な力を得たので、父母の恩に報いるために父母をさとりの世界へ導こうと考えました。そして、その力で見渡してみると、亡き母（青提女）が餓鬼道に落ちて苦しんでいるのを見つけました。飲むことも食べることもできずに骨と皮だけになって苦しんでいる姿を何とかしようと、母の前に神通力で食べ物や水を差し出しますが、母が口にしようとすると燃え上がりなくなってしまいます。とうとう食べることができませんでした。

目連は深く悲しみ、釈尊に相談します。

「お釈迦さま、あんなに私を慈しみ、育てるために苦労してくれた母親が、どうして餓鬼道に落ちたのでしょうか」

「それは慳貪の業による」と釈尊は答えられました。慳貪とは、「むさぼり、物惜しみすること、自分の所有するものを惜しんで他人に与えず、また欲するものを欲望のままにむさぼること」とされ、餓鬼道に堕する第一の因とされています。母は自分の子供を可愛がるあまり、他の子供や他の人への施しを怠ったからと言うのです。

「あなたの力では、母を救うことはできない。」「今度の七月十五日、自恣の日に、お坊様方に食物などの布施供養をしなさい」と教えられました。当時インドでは、雨期の三ヶ月間移動も儘ならないので、一箇所にかたまって安居という修業をしていました。その最後の日、七月十五日は、自恣の日、つまり反省会、総懺悔の日ということになっていました。

目連は、釈尊に言われたとおりにしました。

再び、神通力で母親を探すと、布施の功徳によって、今度は、極楽のうてなで、ふくよかになって楽しそうに暮らしていました。目連は、躍り上がって喜びます。その喜びにちなんでお盆は、歓喜会とも言われ、また、その躍り上がって喜んだ姿が、盆踊りのもとになったとも伝えられています。

目連尊者の母親の餓鬼道の苦しみを倒懸（ウランバナ）といい、後の人々は、目連様にならって自恣の日、亡き方々を思って布施供養をしなさいというのが、お盆の行事となっているわけです。

お盆は、亡き人をしのびつつ、仏さまの心に照らして、私も慳貪の業に陥っていないかを反省する日と言えるでしょう。